

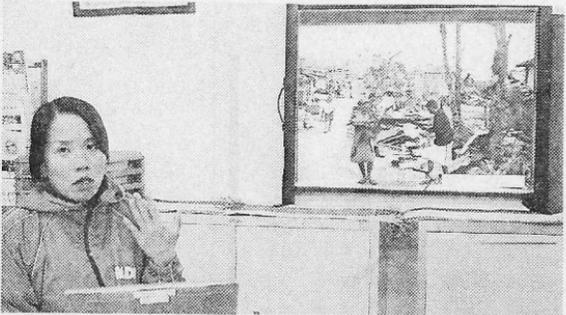
被災地 支援に格差

AMDA 大政さん報告会

台風30号で大きな被害を受けたフィリピンへ支援に赴いた国際医療NGO「AMDA（アマダ）」（本部・岡山市）のスタッフが帰国し、9日に事務所で現地報告会を開いた。地域によって支援活動に「格差」があるとして、国際社会が引き続き援助の手を差し伸べる重要性を訴えた。

台風30号によるフィリピンの死者と行方不明者は約8千人に上り、84万世帯、約400万人が家を失ったとされている。アマダは被災直後から計10人のスタッフが順次派遣し、今も2人が現地です活動している。

報告したのは支援のコーディネーター業務を担ったプロジェクトオフィサーの大政朋子さん(41)の写真。



11月14日に日本を発ち、12月8日に帰国した。

大政さんは11月27日～12月1日、被害の大きかったレイテ島とサマル島に滞在。フィリピン陸軍の協力を得て食料や水、医薬品などをトラックで輸送し、集落を移動しながら配布した。避難所はなく、屋根のない被災家屋でみんな暮らしているという。

レイテ島は物資が届きつつあったが、サマル島は不十分で、救援活動はアマダが初めてという集落もあった。サマル島は反政府勢力の活動が活発なうえガソリン不足も重なり、支援が行き届きにくいという。

アマダで大政さんは東日本大震災の復興支援を担当し、現在は宮城県石巻市に住む。フィリピンの住民に「石巻から来た」と話すと逆に「復興は進んでいるの

か」「ともに頑張ろう」と励まされたという。

大政さんは「困っているすべての地域に物資を行き渡らせるのが現地での課題だった。被災者らへの関心を持ち続けてほしい」と話す。

(吉村治彦)